

24:46 (そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「聖書には) 次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。

24:47 また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、

24:48 あなたがたはこれらのことの証人となる。

24:49 わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」

24:50 イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。

24:51 そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。

24:52 彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、

24:53 絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。

-----

主の昇天 (2013/5/12 ルカ 24 章 46-53 節)

ルカの福音書では復活のイエスは割とさりげなく弟子たちの前にあらわれます。ある弟子がエマオでイエスにあったという話を部屋にもどってみんなとしていると、とつぜんイエスが現れ「あなたがたに平和があるように」と挨拶をします。弟子たちはてっきり亡霊と思いますが、イエスは手足をみせて安心させ、魚を食べるパフォーマンスまでします。ルカは自分が聞いた話

(取材した) を書いているのでしょうか、あっさりしている印象があります。イエス復活のに関する記事を一行書きでまとめてみたような印象です。

同じようにイエスの昇天も一言ですませています。福音書のエンディングもイエスのことではなく弟子たちが神殿におまいりに行っていると結びます。どうして最後にイエスではなく弟子たちなの？ イエス物語の最後として違和感を感じます。すでにルカの気持ちは使徒言行録の執筆に向いていたのでしょうか。

<きょうの福音箇所>

「あなたがたはこれらのことの証人となる」 48 節

あなたがたは弟子たちをさし、これらのことは 46・47 節の箇所をさしています。

- a. キリストは苦しみ
- b. 三日目に復活する
- c. 悔い改めが宣べ伝えられる

の 3 点になります。

つまり 48 節のみことばは「弟子たちはこの 3 点について証言するあかし人となる」という意味になります。

これがルカの福音でのべられるイエス（復活）の最後のことばとなります。

弟子たちは証し人になることで、弟子から使徒と呼ばれる者になり、ルカの 2 部作の使徒言行録の前半の主人公となります。

「福音のヒント」にうまくまとまっているので引用します。

<http://tokyocatholic.cocolog-nifty.com/blog/2013/05/2013512-2446-53.html>

ルカ福音書では、イエスの活動はガリラヤから始まり、エルサレムでの死と復活によって完成します(これが福音書の内容)。

そして使徒たちの活動はそのエルサレムから始まって全世界へと広がっていくことになります(これが使徒言行録の内容)。

弟子たちはもちろんイエスの死と復活の証人ですが、その後、悔い改めと罪のゆるしが全世界に宣べ伝えられていくことの証人でもあります。「弟子たちが告げ知らせる」のではなく、

「告げ知らされる…ことの証人となる」(47,48 節)というのは面白い表現です。もちろん、弟子たちが福音のメッセージを伝えていくのですが、むしろ、弟子たちをとおして、時間と空間を超えた復活のイエスがあらゆる場所の、あらゆる時代の人々に福音を伝えていくという意味に受け取ることができるでしょう。「父が約束されたもの」「高い所からの力」はどちらも聖霊のことです。弟子たちは聖霊という神の力に支えられて、

「証人となる」という使命を果たしていくことになります。聖霊が、あるいは目に見えないが今も生きておられる復活のイエスが、福音を告げ知らせる働きの本当の主人公だと言ってもよいでしょう。わたしたちの使命は、自分の力で頑張って福音を伝えるというよりも、人々の中に働いている聖霊、あるいは復活したイエスの働きを見いだし、あかしすることだと考えてみてはどうでしょうか。(引用終わり)

テレビで見えていたら「妖精が降りてくる」「いつもいつもというわけではないけれど、突然からだが軽くなりとても自由に幸せに踊れる時がある、そんな時にわたしたちは妖精がおりたっています、だからダンスはやめられない」と海外ドキュメンタリ番組でダンサーが話していました。

そうなのかあ、うまいこというなあ、そういう実感ってあるようなあ、と感心してテレビをみていましたが「人びとの中に働いている聖霊、あるいは復活のイエス」というのもそれに似たようなことなのでしょう。

わたしたちは、日曜日にイエスの言葉を聞き、パンと杯をいただく祭りをおこなっています。これは福音を世界に広めていくことである、この行事だけやればいい、そんなことはないでしょう。

さっきのダンサーのように妖精はとつぜん、あるいはさりげなくやってきます。

その時に備える、あるいはその時を見逃さないという意味で宗教行事＝礼拝をていねいにおこなう、繰り返し行う儀礼の意味はそこいらへんにあるとわたしはそう思っています。

主日礼拝は、神を賛美し、みことばを聴き、派遣のことばで行事を閉じます。それは聖餐によってイエスの死と蘇りにあずかり、そして派遣されていくということを儀式で現しています。

平和の挨拶も弟子たちがイエスの死後、部屋に引きこもっていたときに現れた復活のイエスの挨拶を儀礼としておこなっている

ます。

復活したイエスは昇天をもって天に帰ります。イエスは天からきて天に帰っていく、きょうはその出来事を記念する日です。礼拝をとおしてこのことを心にとどめましょう。